



TITLE:

人間愛の起源(下)

AUTHOR(S):

川村, 多實二

CITATION:

川村, 多實二. 人間愛の起源(下). 經濟論叢 1925, 21(6): 821-841

ISSUE DATE:

1925-12-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128355>

RIGHT:

大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一日發行）

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第十二卷 第六號

大正四十二年十二月一日發行

論叢

財産税に於ける都鄙の對立……法學博士 神戸 正雄
人間愛の起源……教授 川村多實二
純正現象學の方法論及び問題論……文學博士 米田庄太郎

時論

勞働組合としての小作人組合……法學博士 河田 嗣郎
食料増殖問題と林業政策……法學博士 山本美越乃

說苑

岡山藩と大阪との海運……經濟學士 黒 正 巖
市町村の混合企業に就て……經濟學士 小山田 小七
歐洲に於ける家産運動及び家産制度……經濟學士 八木芳之助

雜錄

ヒルファディングの恐慌の意義について……經濟學士 谷口 吉彦
妙心寺の財政組織……經濟學士 中川與之助

法令

農林省統計報告規則・會社統計規則

附錄

本誌第二十一卷總目錄

（禁轉載）

人間愛の起源（下）

川村多實二

四 本能と知能

凡そ生物體の有する形態構造若しくは官能を精細に吟味すると、殆んどすべての場合、それが實に巧妙に作られてあり、又は遂行せられつゝあることが知られる。吾々は之を適應性と呼び、又は合目的性と名づけるが、生物が有する基本的性質の一であつて、その由來する所は甚だ遠いのである。従つて進化史上未だ明瞭なる意識や智力を與へられざる間の動物、即ち現今の下等動物の場合でも、その爲すところの種々なる行動が、往々恰も吾々が結果を豫測して爲すところの合理的動作と混同せられる程に、立派な合目的性を有つことがあることは、本稿の第一節にも一言して置いた通りである。

さて動物體に於ける神経系統の發達の歴史を辿つて見ると、本能と知能の關係が容易に明瞭に了解せられる。尤も茲に詳細に之を述べることは出来ぬから、極大體のところを説明する。最初に神経網又は原始神経系統といつて、未だ中樞となる可き部分の無い各部一様の網の如きものが

出来て之で全體の調節をやることとなり、その次に真正神経系統即ち中樞の備はつた新系統が現はれて、之と同時に前の神経網は次第にその影を潜めて行くか、或は末梢部だけに残ることとなる。但し無脊椎動物では未だ體の大部分に原始神経系が残つて居るが、脊椎動物になると、胃腸壁や血管などに限つて僅かに残り、然かも二次的の連絡によつて真正神経系統の中樞からの支配を受ける様になつて居る。而してこゝに作られたる真正神経系統の中樞なるものは、ウニやヒトデでは口の周圍に環形をなして存するが、それ以上の無脊椎動物では、左右相並んで對をなした若干個の塊狀神経球であり、脊椎動物では中央を縦走する脊髓といふ一本の管であるが、此環、球、又は管壁の中に所謂反射運動をなすところの中樞があつて、體の各部分に於ける調整作用、即ち諸種の刺激に應じてする筋の運動とか腺液の分泌とかが、皆此局部的の神経中樞によつて處理せられて行くのである。従つて此動物體の行動は、多數の反射運動の集合と看做し得可きもので、或學者は之を「反射の共和政體」と評して居る。然し此場合單なる集合であつては全體としての統一が取れないから、此反射中樞の相互の間を連絡する若干の神経纖維があつて、各部の行動をして相呼應せしめ、なる可く齟齬矛盾のなきやうになつて居る。然し更にこの機構を一層完全にするためには、體の前方に近く所謂知覺及び運動の中樞なるものが設けられる。無脊椎動物の食道上下にある神経球(食道上にあるものを通常腦髓といふ)の中や、脊椎動物の小腦や間腦又は

大腦の一部分に、此調節や指揮の任に當るところの中樞がある。而して此高級中樞の官能に携はる細胞の數が増し調整の機構が完備するにつれて、動物體に於ける諸種の生理作用や外圍からの刺激に應ずる各種の行動が益精密巧妙となり立派な合目的性を備へるやうになつて來るのである。

然るに神經系統の進化が茲まで達したときに、當然行詰らねばならぬ事情がある。それは何かといふと、右に述べたやうな神經系統の反射中樞高級中樞の活動の機構は全く先天的のもので、遺傳として動物各個に與へられるものであるが、動物の體制が次第に複雑となり、その生活方法も決して單調でなく益繁忙な業務となる。水底に靜座して居る時代と、陸上を馳せ巡り空中に飛躍する時代とを比較すれば、遭遇するところの環境も、食物や恐敵も、後者に於て遙かに其數を増して來るのである。かくの千變萬化複雑極まる狀況に於て、動物が執る可き各般の行動や、臨機應變の處置を、一から十まで先天性本能としてその動物の神經系統の官能上に豫備せしめ置くことは、常に遺傳の負擔を過重ならしめる計りでなく、遂には到底不可能のこととなるのである。動物の方では、さらぬだに既に本能の負擔が過重を訴へて居る。遠距離の移住性、歸巢本能、營巢育兒の如き複雑なる本能が、あの小さな染色體の中に疊み込まれて親から子に間違なく傳はり行くことは全く奇怪なる驚異である。而して一方此過重を軽減せんがためには、本能の二次的簡化さへ企てられてある位であるから、これ以上複雑なる行動をば、本能として動物に與へ

置かうとする企ては、無理であり無謀であると謂つてよい。

この行詰りたる事情を展開せしむる方法として、自然は果して如何なる手段を執つたかといふに、それは、動物個々をして生後の経験から各自の生活に好適なる状況を選び有利なる行動を爲さしめること、云ひ換ゆれば後天性習得即ち私の所謂知能を以て本能に代つて一部若しくは大部分の仕事をなさしめる方法である。尤も體內で起る生理作用の如きものは取捨選擇の餘地が無いから、主として對外關係であるところの行動に於て、特に著るしく之が實施せられたのである。一例を擧げて之を説明すれば、食物を腹の中に容れてしまつてから消化器官が之を取捨し得る範圍には限りがあるから、本能の場合でも、成る可く動物をして口に入れぬ間に辨別選擇せしめる様になつて居るが、知能の場合には特に此點に向つて準備せられてあるので、いづれ後節に再説するが、高等動物の鋭敏なる感覺は、一はそのための用意と解してよいのである。

本能の行詰りの窮境を救つたものが知能の出現であることは、前述の通りであるが、然し實際は本能で全然行詰つた後に急に知能を案出したといふやうな關係にはなつて居ないので、知能の萌芽は大分早くから現はれて、漸次徐々に本能の缺乏を補ふやうな關係を以て生じ來つたのである。現代の動物中最も複雑なる本能を有する部類と云へば、先づ節肢動物特に昆蟲と脊椎動物特に鳥獸であるが、それ等の動物は既に明かに知能を以て生活の手段に利用して居るので、一つの

習性の中に兩方からの要素が混在して居る場合が少くない。例へば蜜蜂の巢を新位置に移すとか蟻の巢の周圍を攪き亂すとかして置くと、巢から出た蜂や蟻は數回巢の周圍を巡つて、嗅覺又は視覺によつてその邊の地形を覺える。それ故蜜蜂や蟻が巢に歸つて來るときには、先づ本能によつて遠距離から一直線に巢の附近に歸着した上で、知能たる記憶によつて正確に巢の入口を判斷するのである。傳書鳩の場合にも之と同様な現象が見られる。又例へば魚や鶏が餌を啄む動作は本能であるが、餌箱の音や足音を聴きつけて集つて來るのは知能である。要するに人間以外にも後天的學習といふことはあり得ることで、無脊椎動物の間から既に之が現はれて居る。果して何類の何目を境として之が有るとか無いとかと確言することは出來ぬが、棘皮動物や環形動物では有るといふ學者と無いと云ふ學者があり、節肢動物や軟體動物には確かに有るといふことが立證せられて居る。然し何といつても、脊椎動物の中の獸類が第一、獸類の中では靈長類や肉食類が第一、而してその中では人間が頭抜けて多くの知能を惠まれて居ることは申迄もない。

知能は後天的の慣習であるから、之が完成のための時日として、相當永き期間の幼少時代を必要とする。従つて動物の行動が知能に依頼すること多くなればなる程、より永き幼少期間を必要とするわけである。獸類の幼少時代が他の動物に比して比較的に永いのは、即ち此理に由るのである。本能のみに依頼する動物にも亦幼少時代はあるが、それは器官を形態學的に完成するに必

要なる期間である。知能に依頼するものではかゝる形態學的の完成の外に、生理學的完成の期間を必要とする。たとへ早くから割合に完備せる器官が與へられても、その使用法の學習を終るまでは、器官の官能即ち利用が充分とは行かぬ。例へば小兒が大人程歩行し得ないのは、主に肉體的に發育不充分であるからであるが、大人と大差なき眼球を持つて居乍ら、事物を識別する力の大に劣るのは、視覺中樞や聯想中樞の發育が不充分であるのと、それ等の間の後天的連絡が未だ出來て居ないからである。知能の中でも特に長期を要する發育と反覆練習とによつて完成せられるものは記憶推理等の智力に關係した方面である。

五 人腦の特色

前節に述べた本能に依頼する代りに知能を以てより完全なる生活を爲さうといふ方針は、人類に到つて最も著るしく採用せられて居る。人間の幼少時代はその全壽命に比して他の獸類よりは著るしく長い。人間が生れ落ちたときは身體防護の行動として缺く可からざる當座の本能のみを持つて居る。即ち乳を呑むこと、不快なときに泣くこと、股の間に他物が來れば蹴つて除けやうとすること、落ちかければ物を掴むこと、いふ様な反射的のことばかりである。漸長じて後も椽側から落ちる、電車にしかれかける。成人の注意が一刻も離せぬ程にたより無きものが人間の子

である。鳥獸は滅多に有毒な植物を食はぬが、人間には本能的にかゝる識別力が無いから、成人でも時々間違へて中毒する。陸産の鳥獸に生れ乍らに水を遊ぎ得る種類が澤山あるが、人間は努力して之を習はなければ溺るゝの外はない。其外此點に關して何程でも例證を挙げ得るが、要するに、人間以外の動物から人間へ移り行くときに、前記生活法の方針が遽かに急變して、本能主義に依る舊方針を極度に放棄して、知能主義を最も著しく採用したやうな形になつたことを示して居る。即ち今日の節肢動物や軟體動物の進化程度では極僅に本能の補助として採用せられ、魚類や兩棲爬蟲類等でも未だ見るに足らず、鳥類哺乳類に於ても尙習性を構成する要素として少部分を占むるに過ぎない知能が、人間に到つて俄かに非常に重要な役目を演ずるやうになり、習性要素の主部分となつたのである。

事物を記憶するためには、先づ外物の明確なる知覺を必要とし、聯想の構成には快不快感情の併存を便とする。夫故人腦には他のいづれの動物の場合よりも進歩したる知覺や聯想の中樞が備はつて居る。人間は最も明確なる感情感覺を備へて居る。尤も單に視覺や嗅覺の強さのみで比較するなら人間以上の感受器官を持つ動物は澤山あり、犬猫でも或點では人間より勝れて居る。然し全體の調和から云ふならば人間の右に出づるものはない。防寒として甚だ便利なるべき毛を吾々が失つたのは觸覺を鋭敏ならしむるためであらう。又我々が音樂を享樂する程微妙なる聽覺

や、美食を味ふ程に微妙なる化學的感覺は人間以外には先づなからう。又(此處で腦髓の構造を説明せねばならぬのを、紙幅を節するために省略するが)、人間程多數の聯想神經纖維と、大なる聯想の中樞とを備ふる動物は他には一も無いのである。人間に於て空前の進化程度に發達したる大腦半球の前頭部皮質中に、最高級の中樞と謂ふ可き此聯想中樞が占據して居て、所謂智力作用を掌つて居るのであるが、單に此智力に關することはかりでなく、多くの中樞間の連絡が縱横無盡、千變萬化の組合せ方を以て備はつて居るといふことが、實に人腦の特色と謂つて然る可きものである。勿論此連絡通路のすべてが必ず使用せられるのではなくて、若しその中に先天的素因として通り易い或通路が略ぼ定まつて居れば、容易に諸中樞の一定の組合せが選定せられるし、若し又特にかゝる素因がなければ、何かの機會で偶々興奮傳達の路となつた纖維が癖となつて其次からは他よりも通り易き順路となり、(この癖となることを生理學では成蹊作用と稱して居る)、之を繰返すことによつて一層明確に一定中樞の組合せが決定せられる。かくの如くにして記憶とか學習とかいふことが可能であり、習性の後天的決定も亦起り得るのである。

然るにこの連絡通路の非常に多いことが更に他の一つの特色を作つて居る。それは何かといふと、興奮傳達が一個の中樞から強て必要とせざる他の中樞にまで波及することである。心理學で有名な錯覺の如きは即ち之に由るのである。又高が一枚の紙一本の樹だと合點しても、崇拜する

人の筆蹟若しくは手植の樹木に對して崇敬の念を禁じ得ないといふのもそれである。坊主が憎ければ袈裟まで憎い。泥棒心も起れば繪心もある。皆右の波及結果である。之れが人腦の特色であつて、聯想が人間程に自由自在でない下等動物では到底斯程廣汎なる範圍までは波及擴大せられ包括せしめられ得ないのである。世間ではよく性慾のことを生殖本能と呼ぶが、眞に本能的なる生殖欲望は下等動物の場合であつて、人間の性慾の中には澤山の後天的要素が混在して居つて、種々なる聯想が之を促がすやうに出來てゐる。犬は猫の交尾を見て少しも刺戟せられないが、人間は一行の文字一枚の畫にでも刺戟せられることがあるのは、此對照を明瞭に説明する事實である。

神經中樞内の連絡は時に一層意外なる方面に向つて開通することがあり、(譬へて云へば電話の混線の如きものであるが)、正常の場合と全く反對の方面が連絡せられる場合もある。その著るしい例は、各種の倒錯症や精神病の場合である。彼性慾倒錯症の患者が常人なれば痛苦を感じ可き外傷や刺戟を受けてゐながら、却て性的快感を覺ゆるのは、全く高級中樞間に或異常なる連絡を生じた爲である。禁慾生活といふことが藝術上の陶醉や科學研究の怡樂を味へる者にどつて、毫も一般人が考へる如き苦痛でないのは(混線の中に入れるのはちと酷いかも知れぬが)全く此理に由るのである。

連絡の範圍が廣汎であるといふことの外に、なほ連絡が短時間で開通すること、及び極幼少のときから之が始まるといふことも、亦人腦の特色である。勿論之は高度の知能を發達せしむるに缺く可からざる性質で、人間の赤ん坊は、之あるがために、生れ落つるご間もなく澤山の物事を覺え始める。或は癖がつくといつた方がよいかも知れぬ。例へば抱く癖をつけたので下に寝ないで困るといふやうな話を聞くのもそれである。又他の鳥獸なれば數十回若しくは數百回繰返して始めて覺える迷路を吾々が速かに記憶し得るのは、全く中樞連絡形成の迅速なるに基づくのである。夫故人間が爲すところの行動に此知能を含みぬものは極少い、否殆んどすべての行動で、それを構成する要素の大部分が後天性慣習にあるといつても過言でないのである。此點が人間愛の起源に關する私の考の根底をなすものである。

六 愛 の 進 化

從來愛に關する考察を公にした人の多くは、愛の進化を哲學的に説明せんとして居るが、その當否は私には分らぬ。然し私が用ひんと欲する如く、愛なる語を定義して夫婦が相親しみ父母が子を撫育するやうな行動の客觀的呼稱とすることが許されるならば、かゝる愛は頗る下等なる動物の間にも存在するのである。之に反して吾々が内省的に自覺し得る所謂愛情なるものは、明瞭

なる意識を與へられた少數の高等動物に限りて存するのであるから、少くとも吾々は此二つのものを區別して考へなければならぬ。従つて吾々は先づ愛の進化し來つた徑路を比較動物學上の客觀的事實に尋ねたる後、更にそれが意識的現象として愛情なる主觀的精神活動に移るところの順序を探究するやうにせなければならぬ。此點が從來諸家の論說中にはあまり考慮せられて居らぬと思ふ。

私は先づ夫婦の愛の進化から述べて行かう。少く動物學を學んだ人は皆原生動物に接合なる現象のあることを知つて居る。之は二個體の一時的又は永久的結合によつて、新しき活力を獲る手段であるが、之と同様に多細胞の場合父母の體より放出せらるゝ生殖細胞即ち精子と卵との間にも著るしい親和力がある。然し多細胞動物中原始的なる海綿や腔腸動物棘皮動物の場合には、雌雄は全然相互無關係に別々に生殖細胞を水中に放出するのであるから、兩親の間には毫も相接近せんとする親和力は存在しないのである。然しかくては生殖細胞が雌雄相合する機會が少く、細胞の浪費となるから、之より少しく進化して來れば、父母間に幾分か體を接近しやうとする性質が顯はれる。蛙や魚の場合が即ち此例で、受精は體外に行はれるけれども、父母は體を接近せしめて置いて精子と卵とを放出して居る。更に一步を進めると、受精を一層確實にするために體內受精が行はるゝこととなり、父母の體は交尾によつて生殖細胞を受授するのである。而して此

ための強き親和力、即ち體を接着せしめんとする行動が即ち夫婦間の戀愛なのである。

次に親子の愛の場合を考へる。最初父母はその生殖細胞の成熟するに従ひ順次體外に放出して少しも顧みないのが通例で、恰かも糞尿が溜るに従つて排出せらるゝと異なる所がない。極下等の動物では此程度である。然し之では受精した卵が種々の障害のために中途に斃死する機會が多いから、親が幾分か子のために育ち易き場所を選定して産卵し置く習性が現はれる。昆蟲が特殊の場所や植物の上に産卵するのは即ちそれである。中には努力して此産卵場所を築造する場合もある。次には單に産卵場所の選定ばかりでなく、卵を温めるとか、保護して敵を防ぐとか、或は長期間餌料を運び來るとか、更に游泳逃走食物捕獲等の技術を傳授するとか、すべてその子の發育を積極的に幫助する本能が與へられることとなる。

これ等の努力は時には母親のみによりて爲さるゝが、又時には父母共に力を協せて之に従事するものである。かゝる場合には夫婦の共同は單に前記の生殖細胞受授の完了を以て終ることなく、引き続き卵の發育に對しても父母の同棲を必要とするから、夫婦の愛に或期間の連續を要求する。一回の産兒數少くして繰返しゝ育兒の動作を爲さねばならぬ場合にも亦、同様に永續的夫婦關係を必要とする。その最も著しいのは人類の場合で、個々の小兒が親の保護を必要とする期間が特に長いから、長子の出生から末子の一人前になるまで、引續き兩親の同棲を必要

とすれば、事實上夫婦は一生涯を通じて同棲せねばならぬことになるので、動物學上からいつても當然のことである。

自ら意識する愛の情緒が存すると否とは別問題として、以上の程度の愛が先天性本能として人間にあることは疑なき事實である。此外本稿の第二節に述べた如く、群集生活社會生活の方法を取れる動物に、仲間同志の相互扶助性が存する。又極稀ではあるが、同じ巢の中に育つた一番子が親の手傳をして二番子に餌を與へるやうな兄弟の愛も見られる。然し此等が本能愛の最頂點であつて、他に之以上の愛なるものは、動物界に本能としては存在して居らぬのである。何等利害關係のなき他の種屬は勿論、同一種の他の個體に對しても、何の理由もなく先天的に憧憬を感ずるといふやうなことはあり得ないので、人間に於ても亦同様である。

七 愛の擴大

私は前々節に於て、知能型の腦髓を有する動物では種々の高級中樞が聯合して速に或後天的連絡を生じ易いといふことを述べたが、私は此方面からして、元來本能的親和の存せざる他人同志の間にも愛の湧き出づることをこゝに説明し度いと思ふ。

鯉の受精は體外に行はれるから、雌雄の鯉は蕃殖期に極短時間の間その體を近づけて游泳する

この外、何等の親和性をも有たぬ。而して雌は卵を産み放した後は少しも之を顧みぬから、子に對する愛も無い。夫故數尾の鯉はたとへ同じ小さな泉水中に群り棲んで居ても、彼等は全然個々別々のものであつて、そこに本能としての愛を認めることは出来ぬ。然し此鯉は毎日拾餌の爲に來る飼主の足音や、集合せよとて打つ手の音を聽きつけて、泉水の一隅に寄り來る後天性の習慣を得て居る。此習慣は生理學者の所謂條件反射であつて、愛情といふやうな高度の意識現象を假定しなくても説明の出來ることであるが、假りに一般世人が日常用ふる云ひ表はし方に従ふならば、鯉はその飼主にある親しみをもち、人間に對する愛慕の情を起して居るといふことになる。若し又彼に食物を齎らす者が、人間でなくて、仲間の鯉であつたとしたらば、彼は鯉仲間に對して、此親しみをもつたに相違ないのである。同様なる事例は他の動物に就ても澤山あることである。餌を運んで呉れる若しくは乳を吞ませて呉れる母親に對してのみ本能的愛を持つ外、全然同種の仲間、沒交渉に棲息する鳥獸の場合でも、若し人間が注意してその幼兒を愛育するならば、恐怖逃避の習癖を助長することなく、親近從屬の慣習を作らしめ得ること人の熟知するところである。彼等の母や兄弟に對する本能的愛でさへも嚴密に云へば生後の變性を免れぬもので、乳を吞むときの快感や折重つて寝るときゝの温味などが、生後直ちに之を著るしく助長し初めることは、疑無き事實である。要するに、私の所謂知能型の腦髓を有する動物では、生後に遭遇する

利害關係、快不快との聯合によつて、元來沒交渉であるべき他物に對しても、頗る著しい愛憎を發生し得るもので、決して或戀愛哲學者のやうにその起源を戀愛に限りて求める必要もなく、ソルグエー派のやうに動物の群棲本能をその本源なりと指定する必要もないのである。若し又母性愛とか性愛とかの如く元來本能的基礎の存在するものであつても全く同一理によつて盛に助長せられる。而して之は本能型の腦に於ては決して見ることの出來ぬ現象なのである。

然るに高度の知能型腦髓を有する動物例へば人間の如きは、神經高級中樞の新連絡が甚だ容易に且迅速に起り易く、且つその組合せも甚だ自由であることから、常に右の如く實際に利害關係を及ぼし快不快感を惹き起したる對象に向つてばかりでなく、之と僅少なる類似とか關聯とかを持つ他物に對してさへも著るしき愛憎を生ずるものである。之は先にも述べた如く聯想上の混線であるから夫婦の愛からでも、親子の愛からでも、或は又前項の利害關係者に對する愛憎からでも出發し得可く、又害敵の恐怖宗教藝術の情操や教育學習の效果たる知識などに到るまで、皆此混線の範圍内に入り來り得るのである。夫故に人間の如き高等動物では愛は生後迅速に擴大せられ、千態萬様の組合せや後天性の新連絡を生じ易いのである。かくして例へば家族に對する愛が直ちに擴大せられてその親近者その嗜好物所持品などに及び、親の子に對する愛は種々なる他物と連合して、忽ち可憐にして小形なるもの清く美しきものに對する愛となる。

此愛の擴大が出生後直ちに始まり、且つ甚だ速かにその範圍を膨大せしめることが、是までの宗教家や哲學者心理學者をして、夫婦親子兄弟の愛以外に尙或本能的なる愛がある如くに誤認せしめたのではなからうか。他人から自己の受けるときの快不快の聯想が自己が他人に對する親切不親切の行動をも快不快に感ぜしめるに到るは、人間なれば甚だ容易なことであるが、之が古人の所謂「人の性もと善なり」の真相ではなからうか。勿論是等は心理學上の大問題であつて、中々さう簡單に論斷す可きことでないであらうけれども、右の如き考へ方にも多くの眞理が含まれて居ると私は信ずる。

東洋には烏に反哺の孝ありといふ傳説があるが、實際は人間以外に親に孝行したり、老人を勞つたりする動物は無いのである。此人間の親に對する愛なるものも全然私の所謂愛の擴大に基づくものであるらしい。之に本能的根據の弱いことは古人もよく知つて居り、親孝行は主に道德として個性人格の中に叩きこまれたものらしいが、然し道德律以外にも尙多少知能としての根柢はないでもない。それは幼時哺育を受けた際の本能的家族的親和の引續きとして起つた愛の擴大が即ち之である。然しそれは決して本能的の博愛心といふ可きものでは無い。又生れ落ちて以來、一度も人情の温味を知らず、ひねくれ僻みたる結果、他人を苦しめて内心の快を貪るやうになつた惡漢が、一朝にして強き愛に目ざめ、生れがはつたやうな善人となることは、小説の筋などに

見るところで、實世間にも稀には起ることであるが、之を以て直ちに本能的なる博愛心が根本に横たはつて存在したといふ證據とすることは出来ぬ。何となれば之は彼が不幸なる前半世の間に作り上げた各種の知能型神經中樞連絡の中、ある良好なる組合せが急に力を得て、今まで彼の行動を支配してゐた多くの好ましからざる組合せに執つて代つたといふに過ぎないからである。斯くの如き急激なる變動は他に幾らも其例がある。例へば人類が始めて性慾なるものを自覺する青年期には、今まで殆んど關聯を有たなかつた諸所の中樞が急に連絡の中に取り入れられ、之に加ふるに幼時全く無意味に受入れてあつたと見ゆる各種刺激の影響が、夏雲の如く一齊に湧き出で、彼の性格、彼の精神活動の範圍なり型式なりを一變せしむることとなるのである。

但し茲に注意す可きことは素因の有無である。前に述べた通り個人によつて或特殊の神經中樞連絡が特に起り易いといふ所謂先天性素因の遺傳があるから後天的に起る愛の擴大や範圍の決定にはたとへ同一種の動物の間でも種々程度の差がある。例へば野生の鳥獸を飼つて見ても、人に馴れ易いものと然らざるものとがあるのは此素因の差違によるものであらう。夫故人間の場合でも、全く同じ境遇に育ち、大差なき知能の發達を遂げた兩人の間に、家族を愛し他人を愛し若しくは他の事物を愛する念に深淺の差の存することは確に有り得るのであるが、然し素因と愛そのものとを混同してはならぬ。人類にも純粹に先天的なる合目的性本能として夫婦親子の愛はあら

う。どんな悪黨でも妻子は可愛がるであらう、家族生活の必要上兄弟の愛も亦少しはあるかも知れぬ。然し乍ら、生れ落ちたまゝ何等の教育も受けず、何等の經驗を積むことなくして、人間がどうして他人の事を考へやうか。吾々が通常人類の愛と稱へてゐる強烈明確なる愛は主としてこれ等本能愛が擴大せられ延長せられ若しくは改竄せられて出來た第二次の部分から成立つて居るといはねばならぬ。

フロイド一派の精神分析學の主張するところでは、性慾なるものが殆んどすべての精神活動に關係して居り未成年者の心理にも、父母が子を慈しむ心にも、或は又藝術の鑑賞にも亦之があるといふ。彼學派は之を説明するに性慾の昇華向上とか淨化とかの術語を以てし、即ち性的原動力が性的目的以外の他の新目的に轉向せしめられるといふのであるが、此説には、多くの穩健なる心理學者が評する如く、多少の眞理が含まるゝと共にあまりに極端である。私の考では、彼學派の謂はゆる目的轉向は人腦の特色たる聯想の擴大混線の一面であつて、性慾が他の種々なる精神活動に關聯を生ずることに、何の不思議はないが、然しそれは性慾だけに限つたことではない。唯性慾が甚だ明瞭なる特徴を有つて居て、之が混在する場合に速に見分け得ることが、彼學派をして之に重を置かした原因ではあるまいか。専門家の一考を煩はし度い。

八 愛情の育成

以上述べ來つた如く、人類の如き高等動物に於ては、戀愛も母性愛も共に本能的基礎の上に立つとはいふものゝそれは極僅少の程度であつて、寧ろ主として知能的要素（但し從來の心理學者のいふ智能とか理性とかの意義でない）から成ると考ふ可きものであるから、個人一代の經歷修養の如何によつて餘程の變異が生ずる理である。況して本能愛の二次的擴大によつて始めて作り出さるゝ博愛、人間愛に到つては全然後天的產物（素因の遺傳は別として）であるから、幼時からの愛情の育成が甚だ大切である。若し愛情の育成が不幸その方向や範圍を誤つたならば、或は常に事物の暗黒面を見、人を疑ひ恐れ、或は人を伴り欺かんとするやうな陋劣なる人格を作り出すであらうし、之に反し若し幸に良好なる方向に伸びるやうに栽培し育成して、益々その範圍を正しき場面に擴大し行くことを得たならば、老幼を勞はり隣人同胞を愛するは勿論、心なき草木蟲魚に對しても、或は更に仇敵に對しても、先づ愛の心を以て接し得る如き圓滿なる人格を作り出すことが出来るのである。今假りに完全なる愛を宿せる人格を神と稱せられるものとすれば、真先に此神に近づき得る者は何者かといへば、最も愛の擴大に適したる高度の知能型腦髓を有する吾々人類であつて、然もその中で最も理想的に最も完全に愛情の育成を成し遂げ得る者でなけ

ればならぬ。

吾々が唯の一回か二回見聞した事物、唯の一度か二度腦中に浮んだ考、それ等は雲烟の如くに消え去つて跡方もなくなつた様に思はれるが、然しその時興奮の傳達が流れた神經纖維の連絡通路が腦髓内に或永續的痕跡を印した筈である。催眠狀態に陥つた者が屢かゝる古く幽かな而して平時には如何にしても呼び起し得ない記憶を取り出して口走することは、この一證と見做し得るであらう。最も發達したる知能型の腦髓に連なれる吾々の神經系統では、與へられた刺激の一つ一つが必ず吾々の神經中樞に何等かの影響何等かのレコードを残さずにはおかないのである。而して此事は知能發達の最も急激なる少年時代に於ては特に著るしい。殘忍殺伐なる小説、放縱なる耽溺生活の映畫、こんなものが如何に人性を傷けつゝあるかは申迄もないが、一輪の花を踏み躪り、一匹の蟲を捻り潰すことは、何でもなき事と意に介せざる親が多いが、それはやがてその子供の愛情・育成に於て一つの妨害となつて居るのである。玩具の犬猫の頭を撫でゝやる氣持、人形を抱きかゝへ之に御馳走を食べさせやうとする氣持、雛壇の前で友達に御菓子を分ちて仲善く遊ぶ氣持、これ等こそは即ち愛情の育成のために大切なる經驗である。今人が舊道德と貶す武士道や儒教、或は時代後れの宗教と謗る佛教や基督教は、成程思想として幼稚なところもあらうし、今日の科學から見ても堪へ難き陷缺があるかも知れぬが、然し兎も角もその時代の人心に廣く且深

い愛を育成したのであつた。昔の子弟は忠孝仁義を家に在るときも外に出て朝から晩まで見せられ吹き込まれたのであつたが、近頃は此點がどうであらうか。私の考では世間は今や殆んど愛情の育成を中止したものと謂つてよい。育成の舊方法を放棄したゞけで何等の新案をも有つて居らぬ。兒童の自由教育を履き違へて、人格養成の手段として躑躅をすることを怠つて居る。かくては現代の青年が放縱不節制となり、小供が我儘で不作法となるは當然ではないか。社會學者は資本主義階級制度の弊をのみ攻撃して、人間の天性の如何なるものなるかを忘れてゐるのではなからうか。人心日々に荒み、人格益々低下して行く今日の有様で、果して階級の打破のみによつて公平無私各人皆に安んずるところの樂土を現出し得ると信せられやうか。或人はかう云ふかも知れぬ、「科學の進歩による大資本主義の擡頭が貧民の職業を奪ひ、人間をして不信實、不眞面目ならしめるのである」と。然り、それも或程度迄事實であらう。然し昔の愛情の育成は單に環境の一要素たる社會組織のみによつて爲されて居たのではなかつたであらう。兎に角、道德の標準が時勢と共に改まり行く可きことは間違ないが、何時の世になつても、根本的に徳育や宗教を放棄し、單に人間の先天性本能に依頼して平和な社會を組織し得るやうな時は決して來まいと思ふのである。(完)